

小学校 第4学年

A表現（1）ア、イ B鑑賞（1）ア

題材名

## まぼろしの花



実践校

養老町立養老小学校

授業者 宮島 雅治

実践時期 1学期

全5時間

## つながりを生かす

- 「もの」とのつながりについては、「まぼろし」という言葉をヒントに、今までに経験したことのない、珍しく、希少で、夢のような「花」を想像し、自分にしか思いつかない花を描くために形や色や周りの様子を工夫して主体的に取り組めるようにした。
- 「ひと」とのつながりについては、描いた「花」を見せ合ったり、「その花から想像したお話」やその感想を話し合ったりして、仲間の表し方・感じ方に触れることを通して、その面白さに気づき、互いに認め合えるようにする。
- 「ちから」とのつながりについては、3年生から使用している「水彩絵の具」に対して、不慣れなところを十分に理解した上で、パスやクレヨンに比べ、圧倒的に色数の多い水彩絵の具の有用性を十分に感じさせる。そして、主体的に道具として自ら選択し使用することで、次学年へもこの力をつなげる。

## 題材の流れ

## 第1時 見通しをもつ

「まぼろしの花」という言葉から、自分なりの想像を広げる。

## 第2～4時（前半）製作（画面作り）

「まぼろしの花」のイメージに近付けるために、画用紙の大きさを4つ切りと8つ切りから選択したり、よりよい描画材料を考えたりする。

## 第2～4時（後半）製作（着色）

球根や種をつくったり、画用紙に色を塗り込んだりしながら、自分の中のまぼろしの花のイメージを徐々に育てながら、まぼろしの花を描く。

## 第5時 仲間の作品を鑑賞する

仲間と作品を紹介し合いながら、「色」や「形」、「イメージしたこと」のよさや面白さを味わう。

## 作品例

大雨の日のことです。

ジャングルのずいぶん奥にある草原で誰も見たことのない、まぼろしの花が咲きました。

その花は、食虫植物がついた危険な動物を食べて栄養にする、5mを超えるととても大きな花でした。動物を食べることで、さらにぐんぐん伸びていきます。しかも、周りの花や草はこの花のおかげで、枯れにくくなったそうです。



## ポイント1

今までの生活体験の中で、「まぼろし」という言葉から想像を膨らませること自体が一つの手立てと言える。そこで第1時では、具体的なイメージをもてるようにするために、以下の4つのことを考えさせた。

①いつ ②どこ ③どんな色・形 ④まぼろしの理由

①ある満月の夜に

②ある家の庭で

③その花は、満月の夜にだけさき、その月の光を浴びると、とてつもなくきれいに輝くのでした。

④しかし、太陽が昇り始めると、その花はあつという間に枯れてしまい、その場所には、枯れた花の1枚も残らないのです。

## ポイント2

もったイメージを色や形に表すために、「何に描く」、「何で描く」を明らかにした。

画用紙の大きさは、児童の気持ちと大きな関わりがある。大きいと迫力のあるものを大胆に描けるが、丁寧な描き出しをしたい児童には抵抗がある。そこで、一人一人が選択できるようにした。

また、児童の多くは、水彩絵の具を筆で思い通りに描く自信がない。しかし、多様な色味を作れる便利さは十分に実感している。そこで、思いに合う色を作る本題材では水彩絵の具の利用が一番適していることに気付かせた上で、他の道具を使うことも許容した。

## ポイント3

鑑賞会では、絵本の読み聞かせのような感じで発表した。これにより、絵から伝わる色や形の面白さだけではなく、想像したこと自体の面白さにも目を向けることができた。

## 授業を終えて

本題材では、自分の制作意図を伝える時間を設けたため、表現自体に自信のない児童でもその世界観を話すことで、「なるほど～」と仲間からの評価を得て、想像することに対する喜びを感じる事ができた。